



TITLE:

支那に於ける水利經濟 - ヴアルガを駁す -

AUTHOR(S):

大上, 末廣

CITATION:

大上, 末廣. 支那に於ける水利經濟 - ヴアルガを駁す -. 經濟論叢 1930, 31(3): 443-454

ISSUE DATE:

1930-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129926>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第

卷一十三第

行發日一月九年五和昭

論叢

法人配當源泉課税の長短……………法學博士 神戸 正雄

米國文化社會學……………文學博士 米田 庄太郎

貨幣の中心機能……………文學博士 高田 保馬

說苑

世界商品價格の決定……………法學士 作田 莊一

京都市に於ける米の小賣相場に就て……………經濟學士 谷口 吉彦

國家經費の轉嫁に就いて……………經濟學士 小山田 小七

雜錄

近世の人口について……………經濟學博士 本庄 榮治郎

支那に於ける水利經濟……………經濟學士 大上 末廣

ソウエート露西亞の都市財政……………經濟學士 大谷 政敬

地券について……………經濟學士 黑羽 兵治郎

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

今年の一月號の『改造』で、故福田徳三博士は、ヴァルガの『世界經濟年報』を評して、その『構想、分析、批判の如何にも該博であると共に深刻であり、鋭利であると共に確實（正確とは言ひ得ない）であることを見出して、駭然として驚きを成すを禁じ得なかつた』とし『凡そ世界經濟の現状の批判的記述として、此の書に現はれたほどのものは……唯一つも見出されない』¹⁾と言つてをらるゝ。

碩學福田博士の惜みなき稱讃をち得た此の『世界經濟年報』の第一輯並に第二輯に、ヴァルガは支那經濟社會の現實と將來に關する自らの見解を、組織的に展開してゐる。而して、彼に在つては、支那社會の最元素的な構成要素をなすものは、農業社會である。従つて彼の支那社會に對する見解は、常に支那農業社會の解析の上に打ち立てらるゝ事となるが、此の農業社會の未來への展望を規定する鍵は、彼の意見に従へば、水利經濟と肥料經濟の二組織——特に前者——である。

支那に於ける水利經濟

—ヴァルガを駁す—

大上末廣

雜錄 支那に於ける水利經濟

第三十一卷 四四三 第三號 一三五

3) 同上、471—2頁

1) 福田徳三博士『新刊書鳥瞰記』140頁（『改造』第二十卷第十一號所載）

それ故に、ヴァルガの所謂水利經濟論を吟味することは、やがて彼が支那社會の未來への行進に關して抱く見解を、基本的に検討すること、なる。この拙論の目的は、彼の水利經濟論に批判的検討を試みることに依つて彼の支那社會の將來觀を吟味せんとするに在る。

二

ヴァルガの水利經濟論を通じて彼が支那社會の將來を如何に見るかを検討するに先立つて、一應彼が、現實に於ける支那の經濟社會を如何に規定してゐるかを觀なければならぬ。この點に關する彼の見解は、一見極めて明瞭ではあるが、然しその實は非常に曖昧である。何故か。彼は、現實に於ける支那社會の本質的機構を説明して『吾々は……支那の事情を特徴づける爲に、封建制度といふ表現を應用することは、利よりも害が多かつたと信ずるものである。……吾々は、この封建制度といふ表現を「前資本主義的」のものとして應用する限りに於てのみ、支那の社會的構造を封建制度と呼びうるのである』¹⁾と言つてゐる。此の言葉に關する限

りに於ては、彼は支那社會の現階梯を『前資本主義社會』即ち商業資本社會と解してゐることは明白である。

現實の支那社會を彼は一方に於てかく定義するが、然し他方に於ては又次の如くに言つてゐる。すなはち『支那の經濟は、外國資本の侵入前に於て、「アジャ的生産方法」即ち同じ階梯に於て同じ技術をもつてする生産過程の限りなき反覆といふ著しい特徴を持つてゐた²⁾が、支那に於ける資本主義的發展は『農村の階級分裂を鋭くし……農民的家内工業の基礎を奪つた』のみでなく『都市手工業の上にも解體作用を及ぼした』³⁾として『資本主義の侵入は、少なくとも單純再生産を基礎とする社會の成立を確保した傳統的社會制度を破壊した』と強調してゐる。彼の謂ふ『單純再生産を基礎とする社會』とは、商業資本社會に外ならぬが、此のものが、ヴァルガの言ふ如く、資本主義社會に克服されたとすれば、現實の支那社會は、産業資本社會であると言ふこと、なる。

かくて、ヴァルガが支那社會の現階梯に關して抱く

1) ヴァルガ著『經濟批判會譯』世界經濟年報』第三輯27頁28頁

2) ヴァルガ同上 34頁、63頁
3) ヴァルガ同上 55頁
4) ヴァルガ同上 69頁

見解は、明かに矛盾を含み混亂に陥つてゐる。惟ふに、支那社會特に秦以後の支那社會は、明白に史的唯物論の存在を拒否してゐるが——支那社會に於ける生産技術従つて生産力が四千年の歴史を通じて、何等の進歩をもなさなかつたにも拘はらず、⁵⁾ 謂所社會的生産力のかゝる停滯とは正に反對に、支那社會の所謂上部構成が如何にすばらしき發達を遂けたかに想到せよ⁶⁾——、かくの如き支那社會の發展の様相は、史的唯物論を唯一の武器とするヴァルガを、如上の混亂に導いたのであらう。然し、此の點を詳細に取扱ふことは、小論の任務ではない。吾々は只、ヴァルガの支那社會にたいする見解には矛盾が含まれてゐると言ふことを指摘すれば足りるのである。従つて、相容れざる此の兩様の見解のうち、何れが眞に彼のものであるかに就て、迷はざるを得ないのであるが、彼は自らの論説の到る所に於て、何らの規定もなしに『支那の資本主義』なる語を盛に用ひてゐることより推して、私は、ヴァルガは現實の支那社會が産業資本主義の初期の階梯に在ると見

てゐると解釋する。

然らば、此の年若い支那の資本主義社會には今後健かなる生長が可能であるか。此の問題にたいする彼の答は、否定である。何故にか。この理由を明ならしめんが爲には、彼の水利經濟論を検討しなければならぬ。そこで、彼が支那の水利經濟に就て述べる所を聽くに、此に關して彼は次の如くに論じてゐる。

『支那については——一切の近東及び中央アジアの諸國家についてと同様に——秩序立つた水利經濟は、死活の問題である。水利經濟は、二つの任務を含む。第一に、洪水に對する防衛、即ち河川の調節である。

支那の大河床は、その流域に沿ふた溪谷の地平面以上、高いから、これは、支那に於て特に重要である。河流は、何千年も前に築かれて何度となく高められた堤防の間をすつと高く流れてゐる。一々の堤防の決潰は、現に數百萬の人間を養つてゐる地域がすつかり泥沼に變つて了ふことを意味する。

第二に、灌漑施設であつて、これは支那に於ける園

5) J. Arnold: Commercial Handbook of China Vol. I. p. 147 p. 197
6) 李權時博士『中國經濟思想史』熊得山氏『中國社會史研究』參看

圃式耕作の基礎をなし、その崩壊は、支那農業にとつて破局を意味する。……灌漑なしでは、收穫は直ちに現在の半分以下に下るであらう。水田の米の收穫は、畑のその二倍も多い。……延々何十萬畧の灌漑用運河は、數千年の作業の結果であり、支那平原を縦横に貫いてゐるのであつて、これらの運河は、水利經濟の基本的重要さを證明してゐる』と言ひ更にかゝる『水利經濟の管理は、以前は凡て中央國家權力の任務であつた。ところが、そんな中央國家權力は今日もはや存在しない』と述べてゐる。

何故に、今日の支那に『中央國家權力』は存在しないか。彼は此の問題に答へて『支那に於ける資本主義の發展は、資本主義が統一力として作用したヨーロッパとは反對に、支那國家の瓦解と中央政府の滅亡とに導いた』⁸⁾からとしてゐる。

すなはち彼に従へば、資本主義が最初の一步を支那にふみ入れた事は、支那國家を跡形もなく解體せしむる事に依つて、水利經濟の社會的諸組織を根底から打

ち碎いた。それ故に、支那の農業社會が従つて全支那社會が、これ以上に資本主義的發展を遂げんとするは、只自滅を意味するのみであると言ふのである。彼自身の言葉を借りて言へば『支那社會の特殊構成の故に、資本主義は、ただに前資本主義的生産關係を破壊するのみならず、……なほ生産そのもの、破滅的没落をも喚び起すことなくしては、自らを完成し得ない』のである。それ故に又『支那の全經濟及び全文化』が今後辿るべき道は、只『勞働者と農民との獨裁に向ふ』⁹⁾こと以外には見出されないと彼は論定するのである。

三

以上は、ヴァルガの水利經濟に關する見解の概要であるが、以下これに對して若干の吟味を加はへよう。彼の所謂水利經濟には、右に引用せる所によりて明なる如くに『河川の調節』と『灌漑施設』との二項が含まれてゐるが、第一に問題となるは、此の二者が、果して彼の主張通りに『全支那の農業にとつて、否全支那の經濟並に文化』にとつて、普遍的な且つ基本的な重

57頁—56頁
48頁—47頁
25頁—上掲書、上
同、上
ガ、ガ、
アル、
ヴァ
7) 8) 9)

要さを有するかと云ふことである。成程ヴァルガの言ふ如くに、河川の調節事業の頽廢は、時には幾百万哩に亘つての農業經濟組織を破壊に導き、幾百萬の人間を饑餓のどん底へ突き落すことがあり¹⁾、また灌漑施設が既に周末に始まつた事は、之を否み得ない。然し私が見る所では、ヴァルガの論説はたゞ一地域の農業に就いて妥當性を持つにすぎない。換言すれば、河川の調節と灌漑施設とは南北によつて大いにその趣を異にし、且つ支那の農業生産の最も重要な基礎を構成するものではない。河川の調節は、北支那特に黄河並に淮河の流域地方の農業にとつては基本的な重要性をもつが、中部及び南方の諸地方に在つては、殆んど全く問題とならぬ。同様に、灌漑は中部及び南方の米作地帯には大切であるが、北方に於てはさうでない。何故に然るか。その理由に二つある。

第一の理由は次の如くである。支那(本部)に於ける水系としては、北に黄河、中部に楊子江、南に珠江の三つあるのみであることは周知の事實であるが、この

三水系のうち、所謂河川の調節の對象となるものは、黄河水系のみである。長江に在つては、湖北省に於ける漢水を除いては殆んど氾濫を見ることはなく、たとい氾濫することあるも、その爲に却つて沃土が堆積せらるゝ傾向がある。また珠江の治水工事は、古來殆んど問題とならぬ⁴⁾。第二の理由はかうである。北支那に於ける主要農作物は高粱、麥、大豆であり、米の産額は殆んど言ふに足りないが、高粱、麥、大豆の栽培に不可欠のものは、灌漑ではなくして氣候の寒冷なること、冬期降雪が多いと言ふことである⁶⁾。従つて、ヴァルガの説を全幅的に承認せる陶希聖氏が、北方支那の農業にも亦灌漑が必要であり、且つそれが農業生産方法を規定する主要な素であるとせらるゝのは極めて多くの條件を前提としてのみ言ひ得るに過ぎぬ。中部及び南方の農業は米、棉、茶、麻を主要生産物とする⁸⁾。而して、此らの農作物のうち灌漑施設を必要とするものは稻のみであつて、棉、茶、麻は之を要しない。後者は只自然の降雨のみにて事足りるのである。

- 1) 民國十四年の夏に於ける黄河の氾濫は、その浸水區域八百萬平方哩、穀物の損害のみにても二千萬元に達す。
- 2) Chinese Economic Monthly, Vol. 2, No. 5. 史記第二十九卷河渠書參看
- 3) 橋機氏『支那農村の階級構成』(『滿蒙』第九年第四號所載)8頁
- 4) 臨時臺灣舊慣調查會第一部報告『清國行政法』第三卷、238頁、254頁、255頁
- 5) 西山榮久教授『最新支那地理』147頁—8頁
- 6) W. H. Mollory; China, Land of Famine; 滿鐵北京公所研究室譯『饑饉國支那』59頁
- 7) 陶希聖氏『中國社會與中國革命』66頁—72頁
- 8) 西山教授、上掲書、146頁、148頁、152頁

かく觀きたれば、先に引用したる如くヴァルガが『一々の堤防の決潰は、現に數百萬の人間を養つてゐる地域がすっかり泥沼に變つて了ふことを意味する』といふのは、只黃河水系地帯にのみ妥當し、また彼の『灌漑なしでは、收穫は直ちに現在の半分以上に下るであらう』との立言は、中部及び南方の水田地帯に就てのみ當嵌るのであつて、決して無條件な妥當性を持つものではない。かく彼が支那の水利經濟にたいして付する意義と重要性が、幾多の地理的制限を受けねばならぬと云ふことは、彼の主張する如く水利經濟が支那農業の最元素的な且つ普遍的な基礎ではない事を立證して餘りある。

ヴァルガの水利經濟論にたいする第二の疑點は、彼の言ふ如く此らの水利經濟の諸組織が、凡て中央國家の權力に依つて創立、維持、管理せられたかと云ふことである。事實吾々は、多くの史家の明示する如くに、河川の調節事業が、古代に於ける支那民族の政治的統一に及ぼした作用に就ては、神禹の傳説にまで溯るこ

とが出来⁹⁾る。然し、吾々の信賴しうる支那史がその明白なる姿を展開し始めたのは、秦以後であるが、秦以後に於ける支那民族の統一に關して決定的な役割を演じたものは、北方蠻族の侵入にたいする防衛である。治水事業は只、神話と古典的儀禮を重んずると云ふ程度に於てのみ、歷代爲政者の關心を引いたに過ぎぬ。

惟ふに、秦以後の支那國家は、常にその社會と二條の幾何學的平行線を描いて發達したのである。従つて、支那社會史の如何なる階梯に於ても、國家が積極的に社會の産業經濟組織を統制し或は保護せんと努力したことは無い。¹⁰⁾ かくの如き特質を有する支那國家が、獨り水利經濟の社會的組織のみを特例として、自己の支配下に置くと云ふことは有り得ない。繰返して言へば、滿州王朝以前に在つては、中央政府自らが積極的に且つ組織的に治水事業に努力した事はなく、洪水の最も激しい地域にたいしてのみ、各個の地方官憲に分散的に工事を擔當せしめたに過ぎない。例を清朝の治水制度の最も主要部分を占むる河防政策に取るに、河は之

9) 尙書禹貢編參看。
10) H. B. Morse; The Gilds of China, p. 19 p. 21 p. 24. 稻葉君山氏『支那社會史研究』33頁、54頁
尙ほ陳茹玄氏『中國民治論』參看。

を北河、東河、南河に區別し、夫々河道總督をしてその事務を司らしめたのである。即ち、北河の河道總督は直隸總督が之をかね、東河には專官の河東河道總督があり、又南河には江南河道總督を置いたが、後之を廢止した。此らの三河道總督の下に管河道を置き、北河に五人、東河に四人、南河に三人を配置し、更にその下に廳及び營が隸屬して、各々その管内の事務を分守したのである。¹¹⁾

滿洲王朝に於ける治水制度は、かくの如く何ら全國的統一なきものであつたが、吾々のこゝに注意すべきは、右にあけた河官の制度は、單に法令上のものに過ぎなく、此が實際上如何なる程度まで運用せられたかと云ふ事である。支那史に現はれたる諸他の歷朝に於けると同様に、多くの自己禮讃に富む清室の記錄に對して吾々は疑ふべき幾多の餘地を見出すのである。更に又法令上に定められたる此等の制度の一部分が實際に行はれたにもせよ、それが果して幾何の實効をあけ得たであらうか。黃爵滋氏は、官憲による治水工事の弊

を突いて『改換別籤有費給發土單有費具認承充有費於是董事等所收土費已盡花散無餘不得已破產傾家以苟求訖事故每逢籤點之時糧少之里糧戶無不視為畏途其有糧多之里則又有人鑽充頂替與工書表裏為奸甚至工書亦自包攬頂替¹²⁾』と嘆じてをらるゝが、黃氏がこゝに指摘せらるゝ如く、堤防の官修は『糧少の里』も『糧多の里』も之を蛇蝎の如くに忌んだのである。官府による堤防の築修は、その實質に於て、大小の官吏に民生の疲弊を犠牲として彼らの私囊を膨張せしむる一機會を與へたに過ぎぬからである。

かくて清室以前に在つては、治水事業は決して中央政府の專管するものではなかつたが、此の事は、灌漑施設に就ては更によく當嵌る。ヴァルガは、既に見たる如くに、支那國家の努力になれる『延々幾十萬杆の灌漑用運河』が支那の平原を縱横に走つてゐると言つてゐる。成程彼の説明する如く『幾十萬杆』にも互る偉大なる運河は、支那文化が吾々に傳へたる誇るべき遺産の一つである。然し、此らの運河は、決して中央政

11) 光緒會典第六十卷並七卷第四十卷
12) 光緒會典第六十卷並七卷第四十卷
嘉慶會典第四十卷並七卷第四十卷
臨時臺灣慣例調查會第一部報告、上掲書第三卷、214頁

府が灌漑を目的として開鑿したものではない。

例へば、楊子江と黄河を連ぬる大運河は、隋より清に至る約一千年間の勞作に成れるものであるが、萬里の長城と並び稱せらるゝ、延々一千哩の此の大運河は、専ら南方の米鹽を北方の帝都に輸送するが爲に作られたものであつて、決して灌漑用のものではない。若し隋、唐、宋、元、明、清等の中央政府が、此の大運河の開鑿を少しでも灌漑に役立てようとする意志を持つてゐたならば、まさか、此の運河の完成のために、淮河の氾濫を引き起す如き愚なる工事を施さなかつたであらう。

江北の兇惡と言はる淮河は、明以後今日に至るまで約百回に互る大氾濫とそれに伴ふ慘澹たる饑饉を惹起してゐるが、此の瀬發する大洪水の原因は、大運河の堤防に妨けられて淮河が從來の自由なる排水口を失つた點に在る。¹⁴⁾ 淮河の氾濫を招致したと同一の原因が、白河を中心とする河北諸川の氾濫に就ても見出さるゝとマロリー氏は語つてゐる。又水路網の發達せること支那第一の稱ある江蘇及び浙江の兩省は、約二萬五千哩の

運河を有し、兩湖地方も亦便河、太平、藕池等の諸運水を持つてゐるが、支那運河の主要動脈を構成してゐる此らの諸運河も、ただ舟楫に便するのみであることは、贅説を須ふる迄もない。¹⁵⁾

灌漑施設に就ては大體右の如くてあるが、こゝに一言付け加ふべき事は、彼が水利經濟に最も關係深き水源涵養の問題に就ては、唯の一言も觸れてゐないといふ事である。支那本土に今日何ら見るべき森林の存在しない事は、¹⁷⁾ 周知の事實であるが、かくの如き無森林の狀態は決して今に始まつた事ではない。南京大學のローゲミル教授は、支那本土が嘗て非常に豊富なる森林を有してゐたことを簡明に指摘してをらるゝ。然し吾々は茲で、かくの如き大資源が如何にして廢滅に歸したかを證議する必要はないのであつて、只彼等歴代の祖先が、他の如何なる國民よりも激しく伐材したその行爲と、かゝる行爲に對して歴代の中央政府が、何らの防衛策を講じなかつたと云ふ事を認むれば、それで足りるのである。この事も亦支那の國家と水利施設

13) Co. Ching Chu: Climatic pulsation During Historic time in China, Geogr. Rev. Vol. 16 pp. 274-282

14) 大村欣一氏『支那政治地理誌』上卷、138頁—142頁、276頁

15) W. H. Mallory; ibid. p. 65.

16) 大村欣一氏上掲書上卷257頁、馬場鐵太郎氏『支那經濟地理誌、交通全編』175頁

17) 山口昇氏『支那の林政』27頁—44頁(支那研究會編『支那研究』第一號所載)

18) W. C. Lowdermilk: Forest Destruction and slope Denudation in the Province of shransi, China Journ. of Soci. and Arto. Vol. 4. pp. 127-135

の關係及び水利經濟の意義が、ヴァルガの指示する如きものでなかつた事を論證する他の材料を提供するものであるが、然しいまは此の點に深く立入らない事とする。

以上に列舉せる此らの史的事實や現實の諸相を、そのありの儘の姿に於て直視する時は、ヴァルガが『水利經濟の管理は、以前は凡て中央國家權力の任務であつた。……多くの灌制度はその維持のために國家の統制的取締を必要とするが、かゝる取締の缺如は、既に此の種の施設の非常な荒廢に導く……云々』¹⁰⁾と言つてゐるのは一體何を意味するのか理解し得ない。尠くとも私には不可解である。

右の吟味の結果吾々は、支那に於ける水利施設の統制管理に關して、ヴァルガとは全く反對の結論に達せざるを得ないのである。然らば、治水事業灌漑の諸制度は、何人によつて創設せられたか。又維持せらるゝか。言ふ迄もなく、此の任務の擔當者は、支那の人民自身であつた。支那の民衆が、彼らの國家がもつ波瀾

の運命とは殆んど全く無關係に、彼ら自身の歴史を創造し發展せしめて行く²⁰⁾その偉大なる力は、治水事業や灌漑施設にも遺憾なく現はれてゐる。然し私はこゝで此らに關する一切の具體的事例を一々列舉することは止めて、只次の如き言葉を引用するに留めたい。陶希聖氏は、成都平原に於ける水利組織に關して『此諸偉大的灌漑制度建設者崇祀爲神。崇祀他們的祝禮實居此平原上民衆的宗教儀式的一大部分。每年中墓地祭掃堤防之修治及地平之調整皆以宗教的熱情行之這是不受戰爭及盜匪的影響而自去實行的改良事業的一個典型。除此以外全生活中皆是混亂糾紛實可驚異』²¹⁾と述べてをらるゝ。この筆者が明白に語つてゐる如く、四川省に於ける築堤、河川の浚渫、灌漑等の諸事業は『全く民衆の宗教的熱情を以つて』『戰爭や土匪に關係なく』遂行せられてゐるのである。然し、これは獨り四川省にのみ限つた事ではなく、全支那の農村に於ける普遍的現象である。熊得山氏の『中國社會史研究』は、支那社會の安寧秩序を維持するものは、國家の法令ではなくし

10) ヴァルガ上掲書 56頁 58頁
20) 宮脇賢之介教授『中華民國とその民衆』19頁—38頁(山口高商『東亞經濟研究』第八卷第二號所載)
21) 陶希聖上掲書 70頁

て、民衆の慣習であることを指摘して『社には……：春秋二回に社神の庭前で大饗宴が開かれる。これは保正又は甲長の召集するもので、水利、堤防、土地の争ひ、灌漑溝と云ふ如き共通利害に關係ある一切の事件を、凡てこの大饗宴に於て解決する。その他、社交や相互扶助に關しても夫々の公約が取り結ばれ、これに違ふものは、保正又は甲長が一定の儀式に従つて、之を私刑に處する』²²⁾と云ひ、『家法嚴於國法』であり『鄉案大似公案』と述べてをらる。

極めて粗雑ではあるが、以上に於て大體ヴァルガの水利經濟論の主要點を吟味し得たと思ふ。只ヴァルガに對する批判として、果して彼の言ふ如くに『支那に於ける資本主義の發展は……：支那國家の瓦解と中央政府の滅亡に導いた』か、といふ問題が一つ残されてゐる。然し不幸にも私は、この問題を正氣になつて一々吟味するだけの度量と時間を持ち合さない。私として持ち得る最大限度の親切は、清史の第一頁を返讀することと、²³⁾支那政治史を一本の金糸もて縫貫してゐる『易

姓革命』²⁴⁾の回顧、並に民國十七年六月に於ける南京政府の全國的霸權的統一とその後に於ける整正統一への底流——表面はまさに七花八裂の相を呈してゐるが——の再吟味を彼に要求することである。ただ當面の問題たる水利事業の國家管理に就て一言するならば、既にみたる如く、水利組織に關する國家の統一的管理は、清朝以前に在つては、何ら行はれなかつたのであるが、それが兎も角國家的統一の形式を具備するに至つたのは、支那の資本主義が漸くその萌芽を現はし始めた民國二年である。即ち、同年十二月に全國水利局が農商部に設立せられて、全國の水利を統督することとなり、此の下に數個の分局を設け、且つ各省に河務局を置き、更に水利委員會を組織すること²⁵⁾なつた。現在に於ては全國水利局は、傳統的諸事情や國內の政治的混亂に妨けられて、極めて僅かの活動をしかしてゐないが、然しかくの如き統一的組織が形式的にもせよ樹立したことは、私の見る所では、紛ふ方もなく、支那國家の意志が清室以前に於けるよりも強大になつた事の具的體

22) 熊得山氏『中國社會史研究』188頁
23) 稻葉君山氏『清朝全史』上下卷參看
24) 呂誠之氏『中國各體小史』參看
25) 馬場鐵太郎氏『上掲書』180—3頁

例證である。然しヴァルガに在つては支那國家の消滅である。

四

『家法が國法よりも重んぜらる、』支那社會に於ては、水利經濟の諸施設は、必要に應じて人民自身の手に依つて、『戦争や土匪に關係なく』組織せられ運營せらるゝ。たとひ清末より今日に至る二十幾年の兵亂が、此の根強き民衆の事業を部分的には妨けたにしても、水利施設が既に見たる如くに、全支那の農業にとつての基石でない限り、その部分的破壊より直ちに『生産そのものゝ破滅的没落を導き出すこと』は、決定的な誤謬である。

もし此らの水利經濟の諸組織が、支那農業の死活の鍵鑰を握るほど重要なものであり、それ故に、それが一切の統制管理が、中央國家の權力に委ね、ばならなかつたのであるならば、支那の水利經濟組織は、從つて又支那の全農業社會は、幾百年もの以前に否幾千年もの昔に既に消滅したであらう。吾々は、前後五百五

十年に亘る春秋戰國の『五霸』『七雄』の争や、秦末漢後に於ける幾多の群雄割據、また百三十年に亘る『五胡十六國』の目まぐるしい朝興夕亡の歴史、唐室衰滅後に於ける『五代』の亂世等、現在の騷亂以上に深刻にして且つ長期に亘る幾多の無國家時代を、四千載の支那史にまざまざと見るからである。支那の農業が、此らの統一的なる中央政府の存在しない時代を、幾度か経験せるにも拘はらず、しかも其らの戰亂の諸時代を通じて僅かではあるが除々に發達の過程を辿つたといふ歴史的事情は、支那農業に於ける水利經濟の地位とその役割を明白に指示してゐる。

然るにヴァルガに在つては、如上の歴史的事情は完全に抹殺されてゐる。それ故に、水利經濟に關する彼の論説は、彼のみに許さるゝ主觀的構想の上に築かれざるを得ないのであり、また時には自らの主觀によつて自由に改鑄せられたる『事實』に基礎付けられねばならぬのである。かくて、彼の水利經濟論は、現實に於ける具體的諸事象に直面する時は、その根底から覆るこ

と、なり従つて又水利經濟論をその基礎要件とする支

那社會の非資本主義的發展論は、跡形もなく倒壊せざ

るを得ないのである。極めて緩慢な步調ではあるが、と

もあれ、歐洲戦争以後に於ける國內資本主義生産の生

長とそれに伴ふ諸機械製造品の漸次的輸出増加等の現

象が、個々の將軍達の私闘とは全く無關係に、日々に顯

著になりつゝある支那社會は、それ故に、屢々引用せ

る支那の『資本主義は：生産そのもの、破滅的没落を

も喚び起すことなしには、自らを完成し得ない』との

有難い豫言を、そのまゝやがて、ヴァルガに返納するで

あらう。喚言すれば、今日なほ低き階梯に在る支那經

濟が今後辿るべき唯一の道は只資本主義あるのみであ

り、又かく發展せる支那の資本主義社會が、永久の繁

榮を未來に約束されてゐる事は、目に見え耳に聞ゆる

現實の支那社會自體が明白に指示してゐる。然し、こ

の小論の任務は、ヴァルガの水利經濟論を克服する事

に依つて、支那社會の今後辿るべき道を消極的に暗示

すれば足りる。従つて、支那社會の發展に關する愚見

の積極的展開は、之を他の機會にゆづることとする。